

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 64-068308

(43)Date of publication of application : 14.03.1989

(51)Int.Cl.

A61K 7/06

(21)Application number : 62-225796

(71)Applicant : SHISEIDO CO LTD

(22)Date of filing : 09.09.1987

(72)Inventor : CHIBA TADAHIRO
MIYAZAWA KIYOSHI
ISHINO AKIHIRO

(54) TRICHOGENOUS AND HAIR-TONIC AGENT

(57)Abstract:

PURPOSE: To obtain a trichogenous and hair-tonic agent having remarkably improved trichogenous and hair-tonic effect, by combining minoxidil with an ampholytic surfactant, semipolar surfactant and a nonionic surfactant having N in the molecule.

CONSTITUTION: The objective trichogenous and hair-tonic agent contains (A) minoxidil [2,4-diamino-6-piperidinopyrimidine-3-oxide (a remedy for hypertension having remarkable vasodilating effect and causing hypertrichosis as a side effect)], (B) one or more compounds selected from ampholytic surfactant (e.g. N,N-dimethyl-N-lauryl-N-carboxymethylammonium betaine) and semipolar surfactant (e.g. lauryldimethylamine oxide) and (C) one or more nonionic surfactant having N in the molecule (e.g. fatty acid alkanol amide).

⑤ 日本国特許庁(JP)

⑥ 特許出願公開

⑦ 公開特許公報(A)

昭64-68308

⑧ Int. Cl.⁴

識別記号

庁内整理番号

⑨ 公開 昭和64年(1989)3月14日

A 61 K 7/06

7430-4C

審査請求 未請求 発明の数 1 (全1頁)

⑩ 発明の名称 発毛、養毛促進剤

⑪ 特 願 昭62-225796

⑫ 出 願 昭62(1987)9月9日

⑬ 発 明 者 千 葉 忠 弘 神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内

⑭ 発 明 者 宮 沢 清 神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内

⑮ 発 明 者 石 野 章 博 神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内

⑯ 出 願 人 株式会社資生堂 東京都中央区銀座7丁目5番5号

明 細 書

1. 発明の名称

発毛、養毛促進剤

2. 特許請求の範囲

2, 4-ジアミノ-6-ヒペリジンピリミジン-3-オキサイドと、両性界面活性剤及び半極性界面活性剤からなる群より選ばれた一種又は二種以上及び、分子内に窒素原子を有する非イオン性界面活性剤の一種又は二種以上とを含有することを特徴とする発毛、養毛促進剤。

3. 発明の詳細な説明

〔産業上の利用分野〕

本発明は公知化合物である2, 4-ジアミノ-6-ヒペリジンピリミジン-3-オキサイドとある種の界面活性剤を組み合わせ、発毛、養毛促進剤として用いることに関する。更に詳しくは、2, 4-ジアミノ-6-ヒペリジンピリミジン-3-オキサイドと、両性界面活性剤及び半極性界面活性剤からなる群より選ばれた一種又は二種以上及び、分子内に窒素原子を有する非イオン性界

面活性剤の一種又は二種以上とを含有することを特徴とする発毛、養毛促進剤に関する。本発明は、医薬品或は化粧品分野において利用される。

〔従来の技術〕

2, 4-ジアミノ-6-ヒペリジンピリミジン-3-オキサイドは一般名でミノキシジルと称される(以下、ミノキシジルと称す)化合物で、その若しい血管拡張作用のため、内服による高血圧治療剤として用いられているが、副作用として多毛症現象が生ずることが知られている。

この知見に基づいて、ミノキシジルを外用局所適用することにより脱毛の治療に効果のあることが報告されている〔ジャーナル・ロイヤル・ソサィエティー・オブ・メディシン(J. ROYAL. Soc. Med.), 75, 983(1982); フリティッシュ・メディカル・ジャーナル(British Med. J.), 282, 1015(1983); ジャーナル・オブ・インベスティグイショナル・ダーマトロジー(J. Invest. Dermatol.), 82, 515(1984); ジャーナル・オブ・インベスティグイショナル・ダーマトロジー, 82, 90(1984)、他〕。

又、ミノキシジルと甲状腺ホルモン(特開昭61-185311号)、ミノキシジルと抗アンドロゲン剤(特開昭61-185312号)などの組み合わせで、これらを発毛成分として含有する養毛化粧料が開示されている。

【発明が解決しようとする問題点】

しかし、これらのいずれの場合でも発毛、養毛促進効果は十分とはいえず、更に、発毛、養毛促進効果の優れた調剤の開発が望まれていた。

【問題点を解決するための手段】

本発明者らは、更に発毛、養毛促進効果の高いミノキシジル製剤を得るべく鋭意研究を続けた結果、ミノキシジルと両性界面活性剤及び半極性界面活性剤からなる群より選ばれた一種又は二種以上及び、分子内に窒素原子を有する非イオン性界面活性剤の一種又は二種以上とを配合することにより、発毛、養毛促進効果が飛躍的に増大することを発見した。本発明は、この知見に基づく。

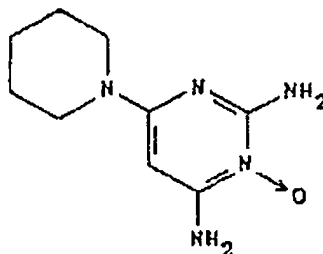
すなわち、本発明は、ミノキシジルと両性界面活性剤及び半極性界面活性剤からなる群より選ば

れた一種又は二種以上及び、分子内に窒素原子を有する非イオン性界面活性剤の一種又は二種以上とを含有することを特徴とする発毛、養毛促進剤である。

本発明品は、特に発毛、養毛促進に優れ、医薬品、化粧料の分野で有用である。

以下、本発明の構成について詳述する。

本発明に使用するミノキシジルは高血圧治療剤として公知の物質であり、次式で示される化合物である。



ミノキシジルの配合量は、0.001~10重量% (以下、%は重量%を表す) 程度である。発毛、養毛促進剤として使用する場合、配合量は多い程発毛、養毛促進効果は大であるが、多量に用いられた時の副作用の発現等を考えて10%以下が好ましい。より好ましくは0.01~7%である。

本発明で用いられる両性界面活性剤としては、N,N-ジメチル-N-ラウリル-N-カルボキシメチルアンモニウムベタイン、N,N-ジメチル-N-オレイル-N-カルボキシメチルアンモニウムベタイン等のカルボキシベタイン、2-ラウリル-N-カルボキシエチル-N-ヒドロキシエチルイミダゾリウムベタイン、2-ラウリル-N-カルボキシメチル-N-ヒドロキシエチルイミダゾリウムベタイン等のイミダゾリン誘導体、N-ヤシアルキル-β-アミノプロピオン酸ソーダ塩、N-ヤシアルキル-β-イミノプロピオン酸-γ-ソーダ塩等のアミノカルボン酸塩、スルホベタイン、アミノベタイン等である。

本発明で用いられる半極性界面活性剤は、ラウ

リルジメチルアミノオキシド、ビス-(2-ヒドロキシエチル)ラウリルアミノオキシド等のアミノオキシド等である。

本発明においては、上記両性界面活性剤及び上記半極性界面活性剤からなる群より選ばれる一種又は二種以上が任意に使用される。

又、本発明に用いられる分子内に窒素原子を有する非イオン性界面活性剤としては、脂肪醇アルカノールアミド、ポリオキシエチレン脂肪醇アミド、アルカノールアミンのエステル、ポリオキシエチレンアルキルアミン等である。

両性界面活性剤及び半極性界面活性剤から選ばれる一種または二種以上の界面活性剤と、分子内に窒素原子を有する非イオン性界面活性剤から選ばれる一種または二種以上の界面活性剤との配合比率は、分子比で20:1ないしは1:40、好ましくは10:1ないしは1:20である。

両性界面活性剤及び半極性界面活性剤から選ばれる一種または二種以上の界面活性剤と、分子内に窒素原子を有する非イオン性界面活性剤から選

ばれる一種または二種以上の界面活性剤との配合量は、両者の合計量で0.001~10%であり、好ましくは0.01~5%である。0.001%未満では、発毛、養毛促進効果の増大が見られず、10%を超えると、皮膚安全性が良くなくなる。

本発明に係わる発毛、養毛促進剤は、ミノキシジルの他に、一般に発毛、養毛促進剤に用いられるサリチル酸やレゾルシン及びヘキサクロロフェンのような殺菌剤や、ニコチン酸、ビタミンE、ビタミンA酸、パントテン酸、エチニールエストラジオール、ヒノキシオール、グリチルレチン酸、ピオザンその他のビタミン類、脂肪酸類、アミノ酸、レチノール、レチニルパルミテートその他のレチノイド類等の薬剤を配合することができる。

又、本発明に係わる発毛、養毛促進剤は、本発明の効果を図るに限り、医薬品、化粧品に一般に用いられる各種成分、即ち水性成分、粉末成分、油分、上記の構成成分以外の界面活性剤、有機溶媒、保湿剤、増粘剤、防腐剤、酸化防止剤、

香料、色剤等を配合することができる。

〔発明の効果〕

本発明は、ミノキシジルと両性界面活性剤及び半価性界面活性剤からなる群より選ばれた一種又は二種以上及び、分子内に窒素原子を有する非イオン性界面活性剤の一種又は二種以上とを含有することにより、発毛、養毛促進効果が極めて優れた発毛、養毛促進剤である。又、医薬品、化粧品に一般に用いられている成分を使用することで、ゲル、乳液、クリーム、エアゾールその他の外用剤に適するどのような剤形にも応用することができる。

〔実施例〕

本発明に基づく実施例及び効果を比較例とともに以下に示すが、本発明はこれにより限定されるものではない。

実施例1 ローション

①	ミノキシジル	2.0 %
②	イソプロピルアルコール	60.0
③	N, N-ジメチル-N-ラウリル	2.6

-N-カルボキシファンモニウムベタイン

④	ラウリン酸ジエタノールアミド	0.31
⑤	精製水	残余

〔製法〕

①を⑤に添加し溶解する。これに、②に③、④を添加溶解したものを加え、攪拌混合して均一な透明なローションを得た。

比較例1

①	ミノキシジル	2.0 %
②	イソプロピルアルコール	60.0
③	精製水	残余

〔製法〕

実施例1に準ずる。

〔発毛試験〕

実施例1及び比較例1、市販製剤(ミノキシジル2%配合)の発毛試験を、毛周期の休止期にあるC3H/HeNCrマウスを用い、小川らの方法[ノーマル アンド アブノーマル エピダーマル ディファレンティエーション(Normal and Abnormal E

pidermal Differentiation)、H.Sciji及びI.A.Bernstein編集、第150-170頁、1982年、東大出版]により試験を行った。すなわち、マウスを1群10匹とし、無塗布、実施例1及び比較例1、市販製剤の4群に分け、バリカン及びシェーバーでマウスの背部を剃毛し、それぞれの試料を1日1回0.1mlずつ塗布した。

各試料の発毛効果はマウス背部の発毛部分を測定して、面積比によって比較した。

〔試験結果〕

試料塗布11日目までは全群に発毛は認められなかった。12日目より実施例1の群のマウスの背部が黒味を帯び、生長期毛となった。実施例1の群では塗布15日目にマウスの約半数が生長期毛に入り、無塗布、比較例1及び市販製剤の群では、塗布21日目に若干のマウスが生長期に移行した。塗布40日後の、マウス背部の発毛部分の面積比を表-1に示す。

表-1

試験試料	40日後の発毛部面積比
無塗布	12%
実施例1	75
比較例1	20
市販製剤	22

表-1より明らかなように、毛の発毛に対する効果は、比較例1及び市販製剤の群に比して、実施例1の群で著しい効果があることが認められた。

実施例2 ローション

①	ミノキシジル	2.0%
②	ベンジルアルコール	10.0
③	エチルアルコール	55.0
④	2-ドデシル-1-ヒドロキシ エチル-1-カルボキシメチルイ ミダゾリウムベタイン	0.04
⑤	ポリオキシエチレン(10モル)オ レイルアミン	0.83

表-2

被験者	年齢	発毛	抜毛
A	36	無効	有効
B	50	無効	有効
C	43	有効	有効
D	33	有効	有効
E	49	無効	有効
F	29	有効	有効
G	31	有効	有効
H	36	有効	有効
I	32	有効	有効
J	31	有効	有効

表-2より明らかなように、実施例2のローションは、抜毛に対しては全員に有効であり、発毛に対しても70%という高い有効率を示した。

実施例3 ローション

①	ミノキシジル	10.0%
②	ベンジルアルコール	20.0
③	イソプロピルアルコール	55.0

④ 精製水

残余

〔製法〕

①を③に添加溶解し、②を加え混合する。これに、④、⑤を①に加えて溶解したものを添加しよく混合した。

〔効果〕

実施例2のローションを、男性型脱毛症及び抜毛の症状を呈する健康人10名(男子、20~50才)に1日1~2回、2~4錠ずつ3カ月にわたって適用したところ、表-2のような結果を得た。

④	2-ラウリル-1-ヒドロキシ エチル-1-カルボキシメチルイ ミダゾリウムベタイン	1.2
⑤	N,N-ジメチル-N-ラウリ ル-N-カルボキシアモニウム ベタイン	1.0
⑥	ラウリン酸ジエタノールアミド	0.0
⑦	精製水	残余

〔製法〕

実施例2に準じる。

実施例4 ローション

①	ミノキシジル	0.0%
②	イソプロピルアルコール	20.0
③	エチルアルコール	50.0
④	ジプロピレングリコール	4.0
⑤	N,N-ジメチル-N-ラウリ ル-N-カルボキシメチルアンモ ニウムベタイン	2.0
⑥	ラウリルジメチルアミノキシド	0.9
⑦	ラウリン酸ジエタノールアミド	0.6

④ 精製水	残余	④ イソプロピルアルコール	50.0
〔製法〕		⑤ ポリエチレングリコール200	5.0
実施例2に準ずる。		⑥ 1,3-ブチレングリコール	7.0
実施例5 ローション		⑦ N,N-ジメチル-N-ラウリル-N-カルボキシメチルアンモニウムベタイン	2.0
① ミノキシジル	1.0 %	⑧ 2-ラウリル-1-ヒドロキシエチル-1-カルボキシメチルイミダゾリウムベタイン	0.7
② ベンジルアルコール	10.0	⑨ ラウリン酸ジエタノールアミド	0.9
③ エチルアルコール	50.0	⑩ 精製水	残余
④ 1,3-ブチレングリコール	5.0	〔製法〕	
⑤ グリセリン	5.0	実施例2に準ずる。	
⑥ 2-ラウリル-1-ヒドロキシエチル-1-カルボキシメチルイミダゾリウムベタイン	1.4	実施例7 ヘアトニック	
⑦ ラウリルジメチルアミノオキシド	0.0	① ミノキシジル	0.1 %
⑧ ラウリン酸ジエタノールアミド	0.0	② ヒノキチオール	0.01
⑨ 精製水	残余	③ レゾニルバルミチート	0.1
〔製法〕		④ ビタミンEアセテート	0.05
実施例2に準ずる。		⑤ ビタミンB ₆	0.1
実施例6 ローション			
① ミノキシジル	5.0 %	⑥ ビタミンEアセテート	0.05
② ベンジルアルコール	15.0	⑦ エチルアルコール	50.0
		⑧ 1,3-ブチレングリコール	4.0
③ イソプロピルアルコール	10.0	⑨ グリセリン	1.0
④ エチルアルコール	50.0	⑩ N,N-ジメチル-N-ラウリル-N-カルボキシメチルアンモニウムベタイン	0.3
⑤ 1,3-ブチレングリコール	1.0	⑪ ラウリン酸ジエタノールアミド	2.75
⑥ 香料	適量	⑫ ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油(P.O.E.:05モル)	2.0
⑦ 2-ラウリル-1-ヒドロキシエチル-1-カルボキシメチルイミダゾリウムベタイン	0.7	⑬ ヒドロキシプロピルセルロース	1.2
⑧ ポリオキシエチレン(10モル)オレイルアミン	0.8	⑭ カルボキシビニルポリマー	0.8
⑨ ポリオキシエチレン(15モル)オレイルアルコール	4.0	⑮ ジイソプロパノールアミン	0.3
⑩ 精製水	残余	⑯ 精製水	残余
〔製法〕		〔製法〕	
①に④、①、②、③、④、⑤、⑥、⑦を順次添加し攪拌混合溶解する。これに、⑧に⑧、⑨、⑩を加え混合溶解したもの添加し、よく攪拌混合した後、ち週しヘアトニックを得た。		①に①、②、③、④を加え溶解する。これに⑤を分散させ組成物(A)を調製する。	
実施例8 グル状美容剤		⑥に⑤を分散させた後、⑥、⑦、⑧、⑨を加えよく混合溶解して組成物(B)を得る。	
① ミノキシジル	0.02 %	組成物(A)を攪拌しながら、これに組成物(B)	
② エチニルエストラジオール	0.002		

を加え混合する。更に攪拌しながら、⑤を添加してよく混合してゲル状養毛剤を得た。

実施例9 乳液

①	ミノキシジル	0.03 %
②	エチルアルコール	25.0
③	グリセリン	5.0
④	1, 3-ブチレングリコール	15.0
⑤	流動パラフィン	3.0
⑥	セチルアルコール	0.2
⑦	ドデシルジメチルアミンオキシ	1.2

ド

⑧	ポリオキシエチレン(15モル)オ レイルアミン	3.5
⑨	カルボキシビニルポリマー	0.2
⑩	香料	適量
⑪	ポリオキシエチレン硬化ヒマシ 油(P.O.E. : 40モル)	1.0
⑫	防腐剤	適量
⑬	ヘキサメタリン酸ナトリウム	0.03
⑭	水酸化カリウム	0.03

⑮	グリセリン	5.0
⑯	流動パラフィン	1.0
⑰	ヒマシ油	3.5
⑱	香料	適量
⑲	N, N-ジメチル-N-ラウリ ル-N-カルボキシメチルアンモ ニウムベタイン	1.2
⑳	ラウリン酸ジエタノールアミド	1.8
㉑	グリセリンモノ脂肪酸エステル	1.5
㉒	防腐剤	適量
㉓	粘土鉱物(ベントナイト)	0.0
㉔	精製水	残余

[製法]

④に①を溶解した後、②を加え混合する。これに、⑤の一部に⑥、⑦、⑧、⑨を添加して溶解したものを加えよく混合する。これを組成物(A)とする。

⑦に⑩、⑪、⑫、⑬、⑭を順次添加し、70°Cに加熱して溶解混合する。これを組成物(B)とする。

精製水

残余

[製法]

②に①、③を添加し溶解する。これを組成物(A)とする。

④の一部に⑤と⑥の一部を添加し50°Cに加熱し溶解混合する。これをホモミキサーで攪拌しながら、⑦に⑧、⑨、⑩を加え70°Cに加熱して混合溶解したものを徐添しながら乳化する。これを組成物(B)とする。

⑪の残部に⑫、⑬の残部、⑭、⑮、⑯を加え溶解した後、これを攪拌しながら、組成物(B)、組成物(A)を順次添加し混合する。更にこれに⑰を加え、ホモミキサーで処理した後、冷却し乳液を得た。

実施例10 クリーム

①	ミノキシジル	0.05 %
②	ビタミンEアセテート	0.05
③	イソプロピルアルコール	5.0
④	エチルアルコール	20.0
⑤	1, 3-ブチレングリコール	10.0

温度を70°Cに保ち、組成物(A)を攪拌しながら組成物(B)を徐々に添加し、予備乳化した後、ホモミキサーで乳化する。

これを、あらかじめ⑥の残部に⑦を添加分散しておいたものに攪拌しながら加え、冷却しクリーム得た。

実施例11 エアゾール

原液処方

①	ミノキシジル	0.5 %
②	エチニールエストラジオール	0.001
③	パントチニルエチルエーテル	0.05
④	ベンジルアルコール	5.0
⑤	イソプロピルアルコール	20.0
⑥	1, 3-ブチレングリコール	10.0
⑦	2-ラウリル-1-ヒドロキシ エチル-1-カルボキシメチルイ ミダゾリウムベタイン	0.34
⑧	ポリオキシエチレン(10モル)オ レイルアミン	0.4
⑨	ポリオキシエチレン硬化ヒマシ	1.0

油(P.O.E.:60モル)

⑤	香料	適量
⑥	エチルアルコール	残量

充填処方

⑦	原液	30.0 %
⑧	フレオン 12	42.0
⑨	フレオン 13	28.0

〔製法〕

⑦に①～⑥を順次加え混合溶解し原液⑦を得る。

原液⑦を処方量充填し、バルブ装着後、ガス⑧、⑨を順次処方量充填しエアゾールを得た。

特許出願人 株式会社 資生堂